

すぎなみ大人塾総合コース

第1回 GENERATION LABーコノ時代ヲ解説セヨ

平成29年5月31日(水) 午後7時~9時 於:セッション杉並 視聴覚室

コース学習支援者 (株)アソボット 伊藤 剛代表取締役

学習支援補助者 NPO法人 場とつながりラボ home's

丹羽 妙ファシリテーター

杉並区立社会教育センター社会教育主事 中曽根 聡

本日から、大人塾が開講します。大人塾には学習支援者はいませんが、先生はいません。また学ぶ側も多様な年齢、経験のある方々です。それぞれのペースで参加してほしいです。

※「すぎなみ大人塾」とは、新しい発想を育む学習の場として、学習支援者のアドバイスを交えた受講者相互の学習や討論を基本に、課題発見や課題解決に必要なネットワーク構築と実践を深めていく長期のプログラムです。

今年のテーマは、「GENERATION LABーコノ時代ヲ解説セヨ」です。

学習支援者、学習支援補助者のほかに、社会教育センターの担当(中曽根、吉川、山田)が事務局としてお手伝いします。何かあればこの3人に連絡をしてください。

学習支援者の伊藤さんは、(株)アソボットの代表取締役で、「シブヤ大学」を創設された方でもあります。10年前にも大人塾ゲスト講師としてご協力いただき、その後も社会教育センター事業にご協力いただいています。

学習支援補助者の丹羽さんはファシリテーターとして各地で活動中です。

※学習支援者…アドバイザーの意見を聴いて講座を企画し、専門性をもって運営する。

学習支援補助者…学習支援者の求めに応じて受講生の学習活動を補佐する。

学習支援者 伊藤 剛

10年前から杉並区とはご縁があり、7年程前には社会教育センターで「コノ世界ヲ解説セヨ」という連続講座を実施しました。今回はその講座をバージョンアップさせた内容となっています。全15回のコースで、3つのミッション、「知る」「問う」「創る」にわけていきます。

アソボットという私の会社は、渋谷区のちょうど真ん中にあり、企業や行政などが伝えたいことを伝わりやすくする、コミュニケーション戦略のコンサルティングをしています。コミュニケーションというのは、常にその主導権は、話し手である私ではなく、実は聞き手の皆さん側にあります。たとえば、テレビの視聴者が好みに合わせてチャンネルを変えたり、電源を自由につけたり消したりするのと同じです。「相手の前提」に合わせて言葉や

デザインを選んで、伝えたい相手への「伝わり方」を考えるのが基本です。

学習支援補助者 丹羽 妙

東京と京都で生活しています。人と人の集まる場を価値ある場にしていくにはどうしたらよいかというテーマで活動しているところです。京都の伏見区では、地域を盛り上げる企画をしています。伏見が好きな人が集まって、会議をしながら、地域をよくする場をつくりました。伏見の良さを取り上げて、絵本にしました。

学習支援者 伊藤 剛

シブヤ大学とは、学びを通してまちづくりを行う NPO 団体です。実際に校舎があるわけではなく、まち全体を大学のキャンパスに見立てて渋谷のあらゆる場所を教室にし、生涯学習の場としました。たとえば、トンネルの地下、神社、病棟、花屋と場所を変えながら、10年間、1000人以上の先生が関わりました。

講座に出た人が、次の授業を創っていくようにもなりました。テーマを決めて、先生を呼んでくる形もあれば、この人を呼びたいから授業を創るという形もあります。

また、このシブヤ大学をモデルに、北海道から沖縄まで全国各地に姉妹校も設立されています。正式な提携校は8校ですが、「まち×大学」と名の付くプロジェクトは全国に100校以上あるとも言われています。

「TOKYO 24区」という日本橋から生まれた企画もあります。このプロジェクトは、これまでまちづくりの分野では主体とされて来られなかった会社員や店舗スタッフなどの「ワーカー」を主役とし、「勤務地（＝働く場所）」の魅力を発掘して、地域コミュニティを作ることを目的としたものです。実際、中央区に住んでいる人は少ないけれど、働きに来ている人はとても多い。昼間の時間帯にはもう1つの区が出現しているということで、東京23区プラス1で「TOKYO 24区」とネーミングしました。はがきサイズの区民カードを作成し、働いている人だからこそ分かるその街の良さや姿を、見えるようにしていきました。

戦後70年の2015年には、『なぜ戦争は伝わりやすく平和は伝わりにくいのか～ピース・コミュニケーションという試み』（光文社新書）という本を出版しました。

私自身、平和学や紛争学の専門家ではなく、コミュニケーションの専門家ですが、10年前から東京外国語大学大学院で、紛争国から来ている留学生に「ピース・コミュニケーション」というカリキュラムを教えています。いわゆる「プロパガンダ」と呼ばれる広告宣伝の技術が、戦争を作る側に利用されてきた歴史がある中で、この技術をいかに平和構築に役立てられるかという新しい試みです。

私が東京外国語大学とかかわるきっかけとなったのは、『ジェネレーションタイムズ』と

いうメディアを作っていたからでして、メディアを作ることで、いろんな人（紛争解決人）と出会う機会となりました。

『ジェネレーションタイムズ』は、一つのテーマを様々なアプローチで探っていくタブロイド誌です。なぜこういうものを立ち上げたのかというと、当時、若い世代が社会問題に関心を持つ機会が少なかったからです。

社会問題として、たとえば「生きる」とか「死ぬ」というテーマを考える特集のときに、まじめにやると若い人には届きませんが、一方で軽くやる内容でもありません。そこで、ネイティブアメリカンの詩集に『今日は死ぬにはとっても良い日だ』というのがあるのですが、こういう詩が生まれる場所とはどういう所だろうかと、実際にナバホ族の村に一週間程ホームステイした記事を書き載せることで、死生観への興味への入口を作ったりしました。

知らないこと、関係がないことを、自分のことにたぐり寄せるのは難しいものです。しかし、たぐり寄せる方法、考え方はあると思っています。

東京を24区と捉えてみることで、「昼間人口」に考えが及ぶかもしれませんし、グローバル社会を実感するのは難しいですが、自分が立っている場所が「70億人の交差点である」という切り口にするだけで、世界の見え方が変わったりします。

今まで見えていたものでも、見方を変えると違った気づきを得ることができます。クリエイティブというのは、「新しいモノの見方」を探る行為でもあります。私自身はそのことを「QREATIVE」と名付けています。「CREATIVE(訳:創造性)と「QUESTION(訳:問い)」を合わせた造語ですが、「新しく問いを作る」ということはもっとも創造的な行為だと思っています。たとえば、それは3歳の子どもが発する問いみたいなものかもしれません。

今回の講座では、いろんな方をゲストにお招きして、まずは自分なりに物事を「知る」ということを追究していきます。9月からのミッション「問う」では、自分で問いを生み出す視点を育んでもらいます。そして11月からのミッション「創る」では、この社会に投げかけるべき問いをチームで考え、互いに学んでいけるよう、講座を進めていきたいと思っています。

(文責：NPO 法人・知の市庭)